

厚生労働科学研究費補助金
障害者対策総合研究事業（障害者政策総合研究事業（精神障害分野））
アルコール依存症に対する総合的な医療の提供に関する研究
（研究代表者 樋口 進）

平成 28 年度分担研究報告書
関係機関（行政、社会復帰施設など）の機能向上のための研究
研究分担者 樋口 進 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 院長

研究要旨

アルコール依存症の回復には医療機関、精神保健福祉センターや保健所などの行政機関、断酒会、DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)、AA (Alcoholics Anonymous)、MAC (Maryknoll Alcohol. Center) など当事者による自助団体、AI-Anon など家族や友人などによる自助団体などの関係機関が重要な役割を担っている。その重要性は平成 24 年 11 月から平成 25 年 3 月にかけて厚生労働省で開催された「依存症者に対する医療及びその回復支援に関する検討会」でも指摘されている。ところが、今までに、アルコール依存症の関係機関の機能向上に関する具体的な研究は行われていなかった。そこで、本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、アルコール依存症の関係機関の機能向上に不可欠な要素をアルコール依存症患者の視点から抽出した。その結果、アルコール依存症として受診に至るまで、「最近、飲酒量が増えてきた」と自覚する、「家族関係が悪くなった」と自覚する、「まずいなど考えつつも飲酒を続ける」ようになる、「止めたいけど止められなくなる」ようになる、「家族に説得されてやっと受診する」ようになる、という各ステージを経ることが明らかになった。そして、そのステージに対応するためのマニュアル試案を作成した。本年度は、そのマニュアルについて、インタビューを行った当事者からのフィードバックを反映した改訂版を作成し、さらにマニュアルについての講習会を行うことで、最終的なマニュアルを完成させた。

研究協力者

蒲生裕司：こころのホスピタル町田

A. 研究目的

アルコール依存症の回復には医療機関、精神保健福祉センターや保健所などの行政機関、断酒会、DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)、AA (Alcoholics Anonymous)、MAC (Maryknoll Alcohol. Center) など当事者による自助団体、AI-Anon など家族や友人などによる自助団体などの関係機関が重要な役割を担っている。

その重要性は平成 24 年 11 月から平成 25 年 3 月にかけて厚生労働省で開催された「依存症者に対する医療及びその回復支援に関する検討会」でも指摘されており、関係機関がその機能を十分に発揮していくためには、各関係機関の役割分担の明確化と連携が重要であり、その地域での、それぞれの役割分担を認識しながら、実態に即した体制を構築していくことが必要

であるとしている¹⁾。つまり、各関係機関の機能を十分に発揮できることが、アルコール依存症の支援に不可欠となる。

ところが、いままでに、社会復帰施設（全国の精神科を標榜する入院医療機関）の機能向上についての研究は行われているが²⁾、アルコール依存症の関係機関の機能向上のための具体的な研究は行われていない。

本研究では、まず、アルコール依存症から回復した依存症本患者とその家族の視点から、関係機関の機能向上に不可欠なものを明らかにすることを目的とする。さらに、その結果に基づき、各関係機関の連携マニュアルの試案を作成し、そのマニュアルに基づいた研修を実施することで、マニュアルの改定を行い、より実用性の高いマニュアルを作成することを最終的な目的とした。

B. 研究方法

対象

調査対象は、現在、関係機関に繋がっている

アルコール依存症患者7名で、自己の経験を振り返って第3者に語るができる者とした。面接中に精神的な動揺などの不快な状態が見受けられた際には調査を中止し、必要な援助を受けられることを保障した。

研究手法

平成27年度までの本研究において作成したマニュアル(案)をインタビュー対象者に確認していただき、マニュアル(案)に修正を加えた。

さらに、このマニュアル(案)を関係機関の関係者を対象とした、平成28年度アルコール依存症回復施設職員研修において、マニュアル(案)に基づいた講習を行った。

そこで得られたフィードバックを反映して、最終的なマニュアルの改定作業を行い、マニュアルを完成させた。

なお、インタビューに関しては研究協力者の蒲生裕司(こころのホスピタル町田)が行った。

倫理的配慮

本研究の実施にあたり、対象者にインタビュー内容を文書及び口頭で説明し承諾を得た。また、個人のプライバシーの保護に最大限に留意すると共に、自由意思による参加、同意の撤回等について文書および口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

C. 研究結果

マニュアル(案)の内容については、インタビュー対象者からの修正意見は得られなかった。

介入のポイントとなる各ステージは、

1)「最近、飲酒量が増えてきた」と自覚するステージ

2)「家族関係が悪くなった」と自覚するステージ

3)「まずいなと考えつつも飲酒を続ける」ようになるステージ

4)「止めたいけど止められなくなる」ようになるステージ

5)「家族に説得されてやっと受診する」ようになるステージ

の5つとなったが、各ステージ毎に1ページに記載する方がわかりやすいだろうとの意見を得たため、マニュアルに反映した。

また、各ステージにおける記載事項のうち、重

要と思われる部分を赤字で強調するなどし、より見やすいものとなるよう修正を行った。

以上の修正を加えたものを、再度、インタビュー対象者に確認していただき、承認を得ることができた。

また、マニュアルに基づいた講習においても内容について修正も求めるような意見はなく、一部の受講者からは「わかりやすいマニュアルである」等の好意的な評価を得ることができた。

D. 考察

上記の結果及び修正手続きにより「アルコール依存症関係機関機能向上のためのマニュアル」を完成させたが、問題点も残る。マニュアル作成のベースとなるデータがグラウンデッド・セオリー・アプローチという質的な研究手法から得られたものであるため、データの偏りは否定できない。したがって、本マニュアルはあくまでも叩き台とし、各関係機関の状況や特徴に即し、随時改訂して使用していただくことが必要と考えられる。

また、本マニュアル作成の過程で、自助団体と行政機関のより密接な関わりが必要であることも示唆された。このことは依存症者に対する医療及びその回復支援に関する検討会¹⁾でも指摘されており、今後、より一層の関係強化が望まれるところである。

本マニュアルでは「スピード感を持って動く」と「しっかりと関係機関に繋げる」ことの重要性が示されたと思われる。この2点をより確実に実行するためにクリアしなければいけないことはまだ多いと考えられ、引き続き、患者の視点に基づいた研究を重ねることは必要であろう。

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

参考文献

- 1) 厚生労働省(2013): 依存症者に対する医療及びその回復支援に関する検討会報告書.
- 2) 樋口進(2006): アルコール依存症の社会復帰施設の実態, 厚生労働科学研究費補助金障害保険福祉総合研究事業 アルコール依存症の車騎復帰の実態把握と支援モデル構築に関する研究 平成18年度総括研究報告(研究代表者 樋口進).